令和５年度
劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業
（地域の中核劇場・音楽堂等活性化）
成果報告書

団体名		公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団
施設名		伊丹市立演劇ホール
助成対象活動名		人材養成事業・普及啓発事業
内定額(総額)		1,818 （千円）
	公演事業	0 （千円）
	人材養成事業	193 （千円）
	普及啓発事業	1,625 （千円）

１．事業概要

（２）令和５年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数（人）	
1	伊丹想流劇塾第７期	令和５年６月～令和６年１月	【講座】講師：岩崎正裕、サリ ngROCK 【読み合わせ会】演出：岩崎正裕、サリ ngROCK	目標値	入場者 100・参加者　累計 180
		伊丹市立演劇ホール		実績値	【読み合わせ会入場者】83 【講座】参加者 11（累計 165）

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

（３）令和５年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程 主な実施会場	概　要 （演目、主な出演者、スタッフ等）	入場者・参加者数（人）	
1	「地域とつくる舞台」シリーズ　いたみ・まちなか劇場「味わう舞台ｖol.5」	令和５年10月18(水) 白雪 ブルワリーレストラン 長寿蔵	【演目／出演者】山本周五郎『あだこ』／林英世、『お父さんのバックドロップ』／坂口修一	目標値 実績値	入場者80 入場者41
2	アイホールレクチャー＆ワークショップシリーズ	令和５年７月～令和６年２月 伊丹市立演劇ホール	【講師】菅原直樹（OiBokkeShi）、小原延之、平田オリザ（青年団）、木ノ下裕一（木ノ下歌舞伎）、若旦那家康（コトリ会議）他	目標値 実績値	参加者累計160 参加者累計221
3	世界演劇講座ⅩⅧ～新時代を生きる劇作家たち～	令和５年７月～12月 伊丹市立演劇ホール	【講師】西堂行人、笠井友仁	目標値 実績値	参加者累計70 参加者累計　71
4	シニアのための「声に出して読む」	令和５年６月～10月 伊丹市立演劇ホール	【演目】向田邦子『かわうそ』他12作品 【講師／出演】林英世	目標値 実績値	156（参加者のべ96、入場者60） 発表会入場者　40 講座参加者　累計120
5	アイホールまちかど広場	令和５年７月～令和６年２月 伊丹市立演劇ホール	【講師／ゲスト】小原延之、岩崎正裕、筒井潤、中村ケンシ　他	目標値 実績値	80 55
6	中高生のための夏休みワークショップ	令和５年７月～８月 伊丹市立演劇ホール	【講師】髙安美帆、田上豊、土橋淳志、中嶋悠紀子	目標値 実績値	180 123
7	土曜日のワークショップ	令和５年４月～令和６年３月 伊丹市立演劇ホール	【講師】ボヴェ太郎、上田一軒、相原マユコ、セレノグラフィカ	目標値 実績値	276 267
8	アイフェス!! 2024(AI・HALL 中学高校演劇フェスティバル)	令和６年３月29日（金）・30日（木） 伊丹市立演劇ホール	対象：市内中学・高校演劇部	目標値 実績値	800 796

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

２．自己評価

（１）妥当性

自己評価
ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
令和５年度においてアイホールは以下のミッション・ビジョンをもとに事業を組み立てた。 【ミッション】 ①舞台芸術の力で、活力に満ちた魅力ある地域社会の構築に寄与する。 ②現代演劇・現代舞踊の拠点として、地域における舞台芸術の振興と発展を図る。 【ビジョン】 ①心豊かな地域づくり ②舞台芸術を担う人材の養成 人材養成事業である「伊丹想流劇塾第７期」はミッション①とビジョン②、普及啓発事業の８つの事業は主にミッション②とビジョン①をもとに事業を計画。伊丹想流劇塾では、受講生が、昨年度も関西発の戯曲賞であるOMS戯曲賞佳作を受賞し、過去10年の間に大賞を含めた７名もの受賞者を輩出。普及啓発事業の「まちかど広場」や「アイホール レクチャー＆ワークショップ」では、地域の抱える課題についてアーティストと共に考える機会を持ち、地域の活性化の一助となることができた。また、「中高生のための夏休みワークショップ」や「アイフェス!!2024」では、中高生に演劇の総合的な学びを促し、発表の場を設けることで、舞台芸術の振興・発展に寄与することができた。また、「シニアのための『声に出して読む』」や「土曜日のワークショップ」、「味わう舞台」では、舞台芸術に気軽に触れる環境を用意し、学びと鑑賞の両面で市民の活力となる企画を実施することができた。
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
＜文化的意義について＞ 人材養成事業では、関西で数少ない戯曲講座の一つとして、劇作家を目指す人たちの筆力の向上に貢献した。普及啓発事業【2】・【3】・【5】では古典／現代劇に関わらず、演劇の歴史や鑑賞に役立つ情報を学ぶ場を提供することで、受講者の鑑賞力とリテラシーを高める機会を設けることができた。【4】・【7】では演劇や舞踊の入門的な講座を通して、地域の方々に気軽に舞台芸術に触れてもらい、社会的・文化的な学習意欲に刺激をもたらすことができた。 【6】・【8】では、ワークショップで市内の中高演劇部の創作を総合的にサポートし、さまざまな成果を「アイフェス！！」にて発表してもらうことができ、次世代育成の一助を担うことができた。 ＜社会的意義について＞ 普及啓発事業【2】・【5】では演劇の知見や方法論を通して福祉や教育などの地域の課題に取り組み、シニア演劇や市民劇など地域の文化のあり方について、アーティストと参加者が共に考え学ぶきっかけを作ることができた。 ＜経済的意義について＞ 普及啓発事業【1】では、飲食店で短編の舞台作品を上演し、食事と共にカジュアルに鑑賞してもらうことで、地域での舞台振興とともに、飲食店の魅力を伝え地域経済に寄与した。

（２）有効性

自己評価
目標を達成したか。
【人材養成事業】受講者・来場者アンケートよりデータ抽出 ・目標①：受講生の満足度について 95%近くを維持する。⇒結果：令和 4 年度 100%→令和 5 年度 100% ・目標②：舞台活動の継続意志の割合を 90%台に維持する。⇒結果：令和 4 年度　100%→令和 5 年度 100% ・目標③：市内及び、伊丹市に隣接する 3 市 1 町（川西市、宝塚市、三田市、猪名川町）の受講生の割合を前年より増やす。⇒結果：令和 4 年度 10%→令和 5 年度 9% ■所見：参加満足度と舞台芸術活動への継続意志を示す者の割合は前年度から引き続き、高い割合を維持した。講師の質の高い指導が結果に結びついたと考える。市内や近接市町の受講はやや少なくなったが、兵庫県内に広げると受講生の割合は全体の 72%を占めていた。 【普及啓発事業】来場者・参加者アンケートよりデータ抽出 ・目標①：事業番号【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【8】において、参加者の満足度を 98%まで向上させる。⇒結果：91% ・目標②：事業番号【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【8】において、市内の参加率を 75%まで向上させる。⇒結果：51% ・目標③：事業番号【1】【2】【3】【5】【6】【7】【8】において、若年層（10 代～30 代）の参加率を 40%台に維持する。⇒結果：令和 4 年度 47%→令和 5 年度 44% ・目標④：事業番号【1】【2】【3】【4】【5】【7】において、60 歳以上の受講率を 40%台に維持する。⇒結果：令和 4 年度 45%→令和 5 年度 20% ■所見：普及啓発事業全体としては、目標は達成できていないが、90%台の高い満足度を維持できた。市民の参加率も目標に届かなかったが、県内に輪を広げると 73%となり、県域での舞台芸術への関心の高さに応えることができたと言える。若年層の参加率は引き続き 40%台を維持することができた。子ども向けの事業はもちろんのこと、「まちなか劇場」でのファミリー層向け事業の親子参加率が高く、子育て世代の多い市内のニーズに応えることができた。様々な年代や地域の人々の参加率は全体的に下がったが、10 代未満～70 代の各世代が 9%～15%とバランスよい割合で来ており、講座やイベントが世代を越えての交流の場としての役割を担っていた。 【全体的な所見】どの事業においても、顧客満足度は目標値を達成、またはそれに近い数値を出せた。人材養成事業では、舞台活動の継続意志を持つ者が毎年多く、それが OMS 戯曲賞などの戯曲賞受賞者輩出につながっていると思われる。普及啓発事業では、舞台芸術の入門編となるような鑑賞事業や講座事業を配することで、初めて劇場にくる親子や、生涯学習に取り組む高齢者などにも広く門戸を開き、次世代の鑑賞者や表現者の育成につながる事業を展開することができた。

（３）効率性

自己評価
アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
【人材養成事業】 「伊丹想流劇塾第 7 期」の講座は、令和 5 年 9 月 4 日（月）は、塾頭である岩崎氏が体調不良で欠席、師範のサリ ng 氏による代講を実施。次の 9 月 18 日を岩崎氏の講義日に振り替えたため、開講日数を減らさずにすべての講座を実施することができた。読み合わせ会は、当初の予定通り行うことができた。 【普及啓発事業】 【5】の「アイホールまちかど広場」内の企画の一つ「演劇サロン」は実施回数全 6 回のうち、ゲストおよび会場スケジュールの調整がしきれず、5 回に減らして実施。 他の事業は当初の予定通り開催することができた。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。
【人材養成事業】 「伊丹想流劇塾第 7 期」講座は運営に支障のない範囲で WEB や SNS を中心とした広報によって印刷費を抑えるなど、経費節減を心がけ、ほぼ予定通りに運営できた。また読み合わせ会は入場無料で実施したため、照明は地明かりだけ、音響は講師自らによるギター生演奏と音効操作によって、照明や音響にかかる経費を抑え事業費を節減することができた。※人材養成事業全体の支出額の要望比 92.36% 【普及啓発事業】 事業番号【2】は、印刷費・宣伝費・郵送料について、チラシ折込を当初の予定より広範に行ったため、かなり予算をオーバーした。また、委託料についても会場をイベントホールに変更したため、音響や照明の経費が想定より嵩み、追加することとなった。しかし、事業チラシを主に館内で作成するほか、WEB や SNS を中心とした広報によって印刷費を抑えるなどの工夫をして、経費節減に努め、当初予算内に収めることができた。※普及啓発事業全体の支出額の要望比 95%

（４）創造性

自己評価
地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。
令和 3 年度まで岩崎正裕がアイホール・ディレクターとして芸術監督的役割を担い、現在も財団演劇事業アドバイザーとして、継続的に事業のサポートに携わってもらっている。 【人材養成事業】 劇作の初歩を実践的に教授する「伊丹想流劇塾」（伊丹想流私塾）で学んだ修了生が相次いで戯曲賞を受賞し、劇作家として評価を受ける人材を数多く輩出している。近年では、山本正典(劇塾第 3 期)が第 27 回（令和 2 年）OMS 戯曲賞大賞を、山本彩（私塾第 17 期）が第 28 回 OMS 戯曲賞大賞および令和 4 年度（第 77 回）文化庁芸術祭賞新人賞を、坂本涼平（私塾第 14 期）が第 30 回 OMS 戯曲賞佳作を受賞した。 【普及啓発事業】 事業番号【1】では、市内の飲食店を会場にして短編作品を上演することで、地域と舞台芸術を結ぶ新たなプラットフォームの役割を果たすことができた。 事業番号【2】では、アイホールに関わった演劇人たちと共に、地域や創作現場の課題解決に向けて、参加者とアーティストが共に考え、学ぶ機会を持ち、暮らしや仕事に活かすヒントを持ち帰ってもらうことができた。 事業番号【3】は、配信にも取り組み、近隣の受講生以外にも参加してもらうことができた。 事業番号【4】は以前より【7】の講座で人気だった講座を発表会付きの単独講座に発展させた。財団の管理する重要文化財である旧岡田家住宅・酒蔵で発表会を上演することで、伊丹の歴史を市内外の観客に紹介することもできた。 事業番号【5】では財団の他施設との連携事業にも取り組み、当館だけではなく、財団全体の認知度を共に底上げしていく役目を果たした。 事業番号【7】では、ダンスや演劇事業で関わったアーティストに初心者でも取り組みやすい内容をとおして、舞台芸術への興味を地域にひろげていくことができた。 事業番号【6】では、市内の中高演劇部が総合的に創作力を向上できるよう、カリキュラムを検討し、ワークショップを実施した。「高校生のための戯曲講座」では、市内だけでなく、他地域の高校生にも学びの場を提供した。【8】では【6】の成果が繋がり、各校ともに、劇作や演技の学びを活かした形の上演に結びついた。   普及【1】『味わう舞台』舞台写真   普及【4】『声に出して読む』舞台写真   普及【5】『まちかど広場』連携事業（ヨガ講座）

自己評価
地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。
【公演事業】※令和5年度は申請していません。 みんなの劇場こどもプログラム えほんミタイナえんげき『どくりつ こどもの国』は、2年にわたるプログラムの1年目であり、1年目のストレートプレイから2年目の音楽劇に発展させることで、演劇の多様性を見せる取組である。ファンタジーの体裁をとりながら、作品の通奏低音として戦争をモチーフに執筆された本作は、少年少女たちの冒険を通して、「戦争の時代」を生きる私たちの「生」と「死」について親と子でともに考える機会として提供。観客アンケートには「心の奥に響いた。子どもたちの未来への祈りを感じた。(50代・女性)」「映画のような展開で面白かった。(9歳)」と、幅広い年代に受け入れられる作品となった。また演劇専門誌『テアトロ』10月号では「情操教育とは命の大切さを伝え、思いやりと知的好奇心を育むことであるが、そのすべてにかなう、センスのいいステージだ」（九鬼葉子）と評された。また、関西で活動する新進の若手俳優をオーディションで積極的に登用し、地域の舞台芸術の振興を果たした。 【人材養成事業】 伊丹想流劇塾受講生からは「なかなか思うように書けませんでしたが、講師に深く掘り下げていただいたり、新しい視点を与えてもらえて、本当に勉強になりました。今後も書き続けたいです」という感想があり、今後も書き続ける意志については、アンケートでは100%となったため、受講生OBの今後の演劇活動に注目していきたい。また、読み合わせ会に関して「全作に作家の“今”が活写された。それぞれの葛藤から一歩を踏み出し、何かを掴もうとする様が伝わり、今後の創作活動への期待が膨らんだ」（『テアトロ』4月号：九鬼葉子）と、劇作家の卵たちへのエールの声が寄せられた。 【普及啓発事業】 事業番号【2】 「（演劇的手法によって）認知症の方に向き合うのが少し楽にとらえられる気がしました」（『老いと演劇のワークショップ』）、「自分の活動に直結した内容ですぐ使えそう」（『演劇サポート講座』）というような感想から、実は仕事や生活のなかで演劇の手法を活かせる部分があることに気づきを得た人が多かった。このように演劇を通して地域の課題に向き合った講座を続けていくことで、舞台芸術と社会生活の結びつきを発見することにもつながっていくのではないだろうか。 事業番号【5】 演劇サロンについて、「とても刺激的」（「高校演劇を語る会」）、「他地域の話をきけた」（『「地域の物語」のつくりかた』）、「全国のシニア劇団の情報を得られた」（『シニアと演劇』）、「地域へのまなざしを再考できた」（『あらたなる伊丹の物語会議』）といったように、地域ごとや、世代ごとの演劇について、今まで交流のなかった人たちが会し、お互いが知らなかった地域性の高い演劇や、高校演劇・シニア演劇に対しての市民側・アーティスト側からそれぞれの目的や、未来への期待を知る貴重な機会となり、地域の文化振興の一助となる企画と言える。

（５）持続性

自己評価
事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。
■令和４年度以降、アイホールは、市民利用率の低さ、多額の指定管理料、施設の老朽化を主な理由に、市当局の方針により経営改善を求められ、これまでのような年間を通じて多種多様な演劇・ダンスの公演事業を企画立案しづらい状況となっている。しかしながら、公演事業が減殺している分、これまで劇場に足を踏み入れたことのない層に対して、いかに普及啓発の充実を図るかが喫緊の課題としてあがっている。 公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団第３次経営計画改定版（令和４年～5 年）においても、「文化会館、音楽ホール、演劇ホールの文化３施設で培ってきた音楽や演劇等のコンテンツを伊丹市のまちづくり・人づくりの政策の方向性に沿ってどのように活用し継承していくのか、施設の枠を超えて再編成」を行う旨が示され、多様な文化施設が充実している当市において、財団が管理している施設間の連携による事業展開は、財団本体としても取り組むべき課題として認知されている。アイホールが携わってきた舞台芸術に関する普及事業や公演事業を、他の施設と連携することであらたな展開を生み出し持続的な活動となるよう、様々な企画事業に取り組んでいる。 「アイホールまちかど広場」で行った、音楽ホールとの「０歳児からの管弦楽コンサート」や、昆虫館とのコラボレーションによる昆虫展示などは、演劇以外の来場者を掘り起こす事業となり、また国・重要文化財である、現存する最古の酒蔵にて実施した朗読発表公演では、劇場にとらわれない新しい舞台事業の可能性を探ることができた。 また、令和５年度に上演した『どくりつ　こどもの国』は、平成 20 年初演の当館オリジナル作品の再創作版であり、次年度には、レパートリーである小劇場作品を、規模をかえて伊丹市立文化会館大ホールにて新たに音楽劇として上演する予定である。 以上のように、演劇、ダンスなどの舞台芸術を、本市において当館単独の事業としてとらえるのではなく、施設規模にとらわれず鑑賞・体験できるさまざまな機会を提供するべく、施設連携をもとにして、地域資源を活用したオルタナティヴな文化事業の在り方を探ることを継続していく。 ★PDCA サイクル 【計画】 約 30 年に及ぶ現代演劇・舞踊に特化した事業実績及び経験の蓄積を活かし、関西はじめ全国の劇団・カンパニーの招聘、ワークショップやレクチャーの講師としてアーティストを招くなど、地域内外の劇団・カンパニー・劇場と幅広いネットワークと連携・協力関係を活かした企画も実施している。 【実行】 状況に合わせて適切な状態で運営できるよう、組織内および事業の関係者間で都度、相談・協力して事業運営にあたった。運営や広報は事業に応じて市関連部局（教育委員会等）と連携して対応している。 【検証】 公演や講座の参加者にアンケートをとっている。また、財団内でも報告書を作成し、自己評価や実施内容の点検を毎回行うようにしている。 【改善】 事業成果報告や担当による振り返りなど内部での事後検証を定例的に行い、また、普及啓発事業の企画によっては、関わったスタッフも招集して反省会を設け、次年度に向けての事業内容の改善・向上を図っている。